

# 浦賀文化

## たたら浜の伝説

往年の「ゴジラの滑り台」を知る人には懐かしい地名「たたら浜」。一方、三浦一族の武将が領地として治めていたといわれる白砂青松の「たたら浜」。その名の由来には謎が多く、私たちの想像力を掻き立てます。



ゴジラの滑り台

映画界で永遠のヒーローの名をほしいままにするゴジラ。最近でも生誕六十年のニュースがマスコミで報じられています。映画の中で、ゴジラは観音崎の沖合に現われて海上を北東方向に進んでいったといえます。これにちなみ、鴨居の「たたら浜」には、ゴジラの足型が刻まれています。この砂浜には、かつてゴジラの滑り台があったことを記憶している方も多いことと思います。

さて、映画シーンの舞台にもなった「たたら浜」の地名は、全国に点在しています。表記方法は「多々羅浜」「多々良浜」など、さまざまです。

地名になった「たたら」には、どういう意味があるのでしょうか。

漢字を宛てると「踏鞴」になります。これは、砂鉄を溶かして製鉄を行う際、火力を強めるためにペダルを踏んで空気を送る装置のことで、「ふいご」を指しています。

私たちにとり身近な存在の「たたら浜」という地名は、九州地方（現在の福岡県）にもあります。鎌倉時代に元の五代皇帝フビライの指揮のもと、二度にわたり蒙古の軍勢が日本を襲撃した事件がありました。鎌倉幕府に大きな影響を与えた文永・弘安の役と呼ばれる歴史的な大事件です。この時の様子を綴った唱歌「元寇」の一節に「多々良浜」に上陸した蒙古軍と鎌倉幕府の御家人が戦う場面が描かれ、長く歌い継がれてきました。

民俗学者・柳田国男によると、「当初踏鞴を取扱ひし種族は、普通の農民より智巧の優越せる外人で、需要に応じ天下を歴巡つて居た者らしく、地中に於て其技術を行ふの風があった為、歐洲に於て幽怪なる隠里の伝説を發生せしめた」とあります。さらに、「其起源を悉く鍛工又は鑄工の居

住に帰するのは無理であらうと思つて居た。・・・タラは必ずしも原料の所在で無くとも、工人の分散して其業を営んだ為であつて、而も燃料又は用水の關係及び場所の清浄を保つ必要等からも逐次に移つていったのかも知れぬと思ふやうになつた。」ともあります。

このことから考えると、古代社会において「たたら」の名を持つ地域では必ずしも砂鉄が採掘されていたとは限らないものの、「たたら」を扱う工人が製鉄を営んでいたことのある場所が存在したらしい、ということになります。

さて、平安時代末期から三浦一族の最盛期を築いた三浦大介義明の四男・多々良四郎義春について紹介しましょう。彼の領地は、その名の通り「たたら浜」一帯を指すといわれています。（古代から中世にかけて豪族や武将が名乗る苗字は、三浦半島を治めていた「三浦氏」のように、その多くが領地の名称を使用していました。）

ここで、多々良四郎義春にちなむ民俗説話ついて見てみましょう。義春は当時、領民に脅威を与えていた「毒竜丸」という海賊船を退治して、その首領である夜叉太郎を討ち取りました。さらに、海賊の副首領である島の浪六を観音堂の堂守にして、海賊船「毒竜丸」を三浦一族の軍船にしまし

た。その結果、領民に平和な日常がもたらされたといえます。

また、軍記物として知られる『源平盛衰記』によると、源頼朝を応援するために石橋山を目指して駆け付けた三浦勢が、衣笠に引き揚げて来る途中に起きた由比ガ浜の合戦で、多々良四郎義春の長男・重春が畠山重忠の軍勢に討ち取られたといえます。

はたして、多々良四郎義春の時代、領地内に製鉄を営む鑄工や刀鍛冶がいたのでしょうか。先にご紹介した、柳田国男の説から推察すると、このあたりで製鉄が行なわれていたことは一概に否定できません。

「たたら浜」にある観音崎自然博物館は、以前、今の位置と道路を隔てて反対側にある公園の奥にありました。その周辺からは、古代の土器文化を示す発見がありました。これは、「たたら浜」における多々良一族の住居跡を推測させるものであり、今後の研究による解明が期待されます。

（芳賀久雄）

### ★参考文献

- ・横須賀雑考 横須賀文化協会
- ・鎌倉三浦半島おもしろ地名考 多摩川新聞社
- ・柳田国男全集 第八巻 筑摩書房
- ・三浦大介義明とその一族 三浦大介公八百年祭実行委員会
- ・浦賀古今写真集 横須賀市



# 歴史 語りい座・浦賀 三十九

郷土史家

山本 詔一



## 『近世浦賀畸人伝』目

—柴崎簾風—

大正四年（一九一五）に刊行された『浦賀案内記』は、明治から大正期の浦賀の様子を知ることができる貴重な本である。この本の価値は、本文もさることながら後にある商店や工場の広告にある。この広告の中に「万能鎧膏本舗・柴崎金八」もあった。

この万能膏薬は通称「百足膏」と呼ばれ、黒くてにおいも強いが、虫刺され、疵、やけどなど何にでも効き目があったことを古老に聞いた。また、子どもたちは「百足」を捕まえて柴崎に持っていくと一匹何銭かで買い取ってくれたので、お小遣いがかせげる魅力もあったという。

この毒をもって毒を制す万能膏薬を考案したのが、柴崎簾風であった。

簾風は本名を伊助といい、正確な生まれ年はわからないが、奉行所が伊豆・下田から移転してくる享保五年（一七二〇）より少し前ころと思われる。若いころに娼家を開き、順調に業績をあげ、栄華を極めたこともあった。しかし、次第に衰え、独り身になって江戸へ流れていった。

江戸の地で悪い病気に罹り、普通の人であれば気が弱くなって衰弱するところであるが、簾風はこうした

困難な境遇をものともせず、フグの汁を飲み、ウナギを食べ、さらに居酒屋でサメの刺身を芥子で食べ、したたか酒を飲んで家に帰った。そんな無茶なことをしてと思ったら、やがて悪い病気が快方に向かった。これが「毒をもって毒を制す」ということであった。

これで全快した簾風は、浦賀に戻り家に伝わっていた膏薬を近隣の人々に分け与えていた。浦賀は湊町で全国の船が集うところであったので、この膏薬の評判が広がり、ついにはこれを商うようになった。そうして、また豊かな生活を取り戻した。簾風は、いつも頭巾をかぶっていたので、この膏薬は「頭巾膏」と呼ばれた。

—加藤照慶—

加藤照慶は、本名を五兵衛という全国を渡り歩く船乗りであった。

ある時、品川より浦賀へ帰帆のため、照慶は船先で碇綱をまるめた綱の上に跨っていた。出航準備をしていた他のメンバーは、碇を上げるため、轆轤を巻き始めた。すると照慶の右足に綱がからみ、ついにはその大綱で右足の膝下がちぎれるほどの大けがをしてしまった。十数人いた船乗りたちが慌てふためいて、小船で鉄砲洲（現在の東京都中央区）まで

運んだ。通常の人なら肝をつぶし、ショックで死んでしまいうような傷なのに「大丈夫」の心はうすらぐことはなかった。

戸板に乗せられて茅場町の間屋にかつぎこまれ、ここで医者にみてもらうことになった。周囲の方が恐怖心でまともに見られない状況にあったのに、照慶は、食事を頼み、握り飯を十二、三個食べたという。医者がきて、傷をみると回復どころか切斷しなくてはならない状況であった。またまた周囲が、この事実をどのように伝えるかで揉め、いよいよ足を切斷することになったが、まったく泰然自若の様子に変わりはなかったと記している。

切斷した足は本所の無縁寺に葬り、数十日して傷が癒えたと浦賀に戻り、足がなくてもできる職業をと、綿打ちを始め、「綿屋」と呼ばれて三十数年を経て、寛政四年（一七九二）十二月に七十余歳でその一生を閉じた。現在は東浦賀の浄土宗の法幢寺に眠っている。

### 展示室お休みのお知らせ

展示替えのため、10月29日〜31日の三日間、浦賀コミュニティセンター分館内二階の展示室をお休みします。期間中、コミュニティセンター分館は、通常どおり開館しております。

### 笑話一題

昭和三十年代、高坂小学校に通っていた頃の話です。今の小学生はわかりませんが、私が子供の頃は愛宕山に行く機会が多くありました。山頂からの眺めはすばらしく、天気の良い日は、絵画の時間に先生に連れられ愛宕山に登って写生をしました。山の上からは金谷行ききの汽船乗り場や、遠洋漁業のマグロ船で賑わう浦賀港が見えて写生をするには最適でした。

六年生の時、子供の日のイベントで『相撲大会』が愛宕山で開催されるというので参加しました。対戦相手は細身であったので、簡単に勝てると思ったのですが、結果は：残念ながら上手投げでなげられてしまいました。後で聞いたのですが、その相手はなんと曾我十郎の子孫だったそうです。やんちゃ仲間にはひやかされた、ほろ苦い思い出です。

愛宕山公園は、明治二十四年に開設され、園内には、中島三郎助招魂碑や、咸臨丸出港の碑、与謝野夫妻の歌碑などがあります。文献によると、この公園は浦賀奉行所与力中島三郎助を顕彰する目的で作られたということでした。

愛宕山に登ると、当時の浦賀の賑わいと活気あふれる町の様子が、懐かしく思い出されます。

（七丁目の夕日）



### お詫びと訂正

浦賀文化 38号「葛飾北斎と浦賀」に掲載の挿絵のキャプションに誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

誤 「相州浦賀」北斎漫画より  
↓  
正 「相州浦賀」千絵の海より